

## E 分科会：ジュニア期の指導のあり方について

E 分科会は、普段の何気ないスポーツ少年団活動の中に「何か問題があるかもしれない、それを掘り起こしてみよう」という趣旨で、指導者の皆さんが、あたりまえと思っていることにあえてスポットをあてて協議を行った。

富田先生より、学年別の指導、単一種目での技術指導のみが行われているケースが多いのではないかと？技術指導偏重で持久能力を高めるトレーニングが少ないのではないかと？などの問題提起があり、そしてその対応策についての提案があった。また、新たに集めた運動適性テスト 5,100 名データについての報告及び考察があった。文科省で出している体力測定の結果は年々低下しているというのが常識的な内容であるが、スポーツ少年団の児童を対象に行った運動適性テストの結果を見る限り、30 年前と比べても、良くなってきているという結果であった。これは子ども時代からスポーツ少年団においてスポーツを行うということの効果ではないかと思われる。

次に心理学的な面からということで中島先生より、子どもたちのパーソナリティの脆弱化や周りとは巧くコミュニケーションが取れなくなっているという問題は、スポーツ活動の不足や偏りが影響しているのではないかとという考察とその対応策について提案があった。

最後に村田先生より、栄養学的な面からのアプローチで、昨今、朝食を摂らない子どもが増えてきているが、朝食を摂らないというのは生命の活動上問題があるし、学習能力にも影響があり、普段から、また、スポーツ活動前には特に注意して食べる事が望ましいとの話があった。医科学的な側面からは、子どもの発育・発達において、特に身長伸び具合から個人個人の発育曲線をしっかりと把握した上で、発育・発達のどの位置にあるのか考えながら指導にあたる必要があると同時に運動能力の伸び方もよく考えながら指導する必要がある。という 2 つの提案があった。

最終的な報告として、E 分科会では以下の 5 つの内容を確認して終了した。子どもたちそれぞれの発育の度合いをよく考えた上で子どもたちに接する。余裕(=幅広い内容)のある指導を行う。年齢に関係なくそれぞれ何をしたいのか、意欲と動機付けをはっきりしていくことが自主性を高めることに繋がる。アメリカで行われている 3 段階のスポーツ指導(村田先生より紹介) = 3~7 歳は「Sports Fun(いかにスポーツを楽しむか)」、7~8 歳は「Sports Play(実際にスポーツを行う、体験する)」、8~10 歳は「Sports Basic(それぞれのスポーツ競技の基礎)」を理解して指導に臨む。専門種目についてのみ技術指導や活動だけではなく、遊び的なこと、他の身体の部分を使う活動を準備運動や整理運動、夏や冬のプログラム等に加えることが子どもたちに幅広い運動能力を高める基礎を作ることになる。